

精神発達遅滞幼児のグループ指導に関する一報告

加藤 義男 湯沢 脩* 高瀬 桂子*
 宮本 中子* 長谷川嘉代子* 斎藤 真理*
 栗生沢淑子** 根田 牧子** 藤原フサ子***

A Report on the Group Play Therapy of Infant Mentally Retarded

Yoshio KATOU Osamu YUZAWA Keiko TAKASE
 Atsuko MIYAMOTO Kayoko HASEGAWA Mari Saitou
 Kiyoko KURIUZAWA Makiko NEDA Fusako FUJIWARA

— は じ め に —

本論文は、昭和48年7月から昭和49年3月にわたって、岩手県中央児童相談所において取り組まれた、精神発達遅滞幼児のグループ指導に関する報告である。

加藤、栗生沢、根田、藤原は取り組みの当初より協力者として参加した。

本論文は、この取り組みの反省と今後の展望について討議しあう中でうみ出された、スタッフ全員の協力に基づく、ささやかなまとめである。〈加藤〉

I. 問 題

本論文においては、精神発達遅滞幼児の幼児期における治療教育の問題について、昭和48年度に岩手県中央児童相談所で取り組んだ実践活動を報告し、あわせて若干の検討を進めてみたいと考える。

あらためて言うまでもないが、心身障害幼児の「早期発見」、「早期治療」の考え方は、以前からその必要性が叫ばれており、今日では心身障害児対策の一般原理としてとらえられている。

これを児童相談所の活動でとらえると、保健所で行われている三歳児の健康診査後の、一層精密な診断の確立と、心身障害児の発見後の指導を分担することで、早期発見・早期治療への具現化が期待されているわけである。

しかし現状をみると、「早期発見」は別として、「早期治療」については組織的な実行が殆んどなされていないと言わざるを得ない。当児童相談所で昭和47年度に取り扱った「三歳児の精神発達精密検診」での該当児9名についてみると、その殆んどが一回限りの面接による助言・指導にとどまり、当該幼児とその両親に対する組織的かつ継続的な指導は実行されなかったと指摘される***。

* 岩手県中央児童相談所職員

** 岩手大学教育学部学生

*** 実行されなかった外的要因の一つとして、当児童相談所が昭和48年5月まで仮庁舎住いであり、集団指導の為の十分な場を確保しえなかった事があげられる。

本論文において報告されるグループ指導での対象児童は、昭和47年度に当児童相談所で相談受理した児童（その多くは三歳児の精神発達精密検診での受診児童である）のうち、週2回の母子通所が可能であり、他のいずれの関連施設にも所属しておらず、集団保育の場を保障されていない児童が対象とされた。

これまで述べてきた如く、本論文において報告されるグループ指導の役割は、ひとつには、児童相談所における「三歳児の精神発達精密検診」の事後指導としての意味をもち、さらに市町村が実施主体となる公的な心身障害の通園施設が整備されるまでの補完的な役割を担うものと規定されよう。(湯沢)

1. 取り組みの動機及び目的

(1) 取り組みの動機

心身障害幼児の多くは、早期療育の必要性にもかかわらず、殆んどの場合、集団療育の場から疎外されているのが実情である*。また、こうした母子の多くは、遊び相手も相談相手もなく、家の中に閉じこもりがちである。

さらに、こうした問題に対する社会の考え方が、“精神薄弱児だって？ それなら施設に入れたら、”といった安易な取り組み方や拒絶の傾向に傾いていると言えよう。

こうした社会的状況に置かれた母子を相談臨床の場でつぶさにみるにつけ、継続的なグループ指導の場を痛感し、取り組みへと動機づけられたと言える。

(2) 取り組みの目的及び基本的な考え方

我々は、精神発達遅滞幼児のグループ指導に取り組むにあたって、その目的を次の(i)～(iv)の四点に要約してとらえ、ささやかなものであっても着実に到達できうる事を目標とした。

(i) なりよりもまず、母子を家の中からひっぱりだそう、(ii) 早期療育の場から疎外されている子ども達に、集団生活を経験できる場を、ささやかではあるが提供していこう。そして、経験を拡大させ、発達を促進し、子どもの持つあらゆる可能性をひきだし、将来像をみい出していこう。(iii) 母親同士がお互いの悩みや苦しみをぶつけ合い、考えあえる場を提供しよう。そして、子どもを正しく理解でき、母子共に手をつないで堂々と街中を歩ける強たくましい母親になってもらおう。(iv) 最後に、我々自身の障害児に対する理解と認識を深め、問題意識をより明確にする為に、子どもや母親から勉強させてもらおう。そして今後の仕事の糧としていこう。

以上四点を目的として取り組みを行なった。

次に、こうした目的の前提となるべき、心身障害児に対する我々の基本的な考え方について簡単にふれておきたい。

(イ) 子どもはすべて、私達人間社会の、幼いがしかし大いなる可能性を秘めた新しい仲間である。(ロ) 子どもはその幼い生命を、親の愛によって守られ、はぐくまれなければならない。(ハ) 私達社会は、さらに大きくそれを包み、あらゆる努力を払ってその成長を助けなければならない。(ニ) しかも、いかなる理由によってもその生命を社会から隔離し、疎外してはならない。(ホ) 私達は、新しい仲間の秘めたる可能性をできるだけひきだし、同じ時間を生きる同じ

* 現在の岩手県においては、精神発達遅滞幼児のための専門の保育・教育の場は、殆んどないと言える。保育園・幼稚園における取り組みも活発とは言えない。

人間として、生きる喜びを共にわかちあわねばならない。〈湯沢、宮本〉

2. 他地域における、障害幼児との取り組み状況について

本稿では、障害幼児、とりわけ精神発達遅滞を基底症状とする、ちえ遅れ、自閉的障害を持つ幼児を対象とした、最近の実践的な取り組み状況について概観していきたい。

取り組み状況を概観してみると、(i) ここ数年来、制度的な裏づけを待っておれずに、子どもを持つ親と関与者の熱意によって、幼児期からの集団療育の場が各地につくられてきている、(ii) 同時に、一般の子どもとの交流を大切にしたいという願いが強まる中で、一般の幼稚園、保育園において受けとめて欲しいという要望が強まり、幾つかの実践例がみられてきている、と言えよう。

以下において、この二点に焦点をあてつつ、概観していきたい。

(1) 全般的な取り組み状況について

何らかの障害を持つ幼児の発達にとって、障害を持つ故にこそ一層、一般の幼児と同等にあるいはそれ以上に、早期からの適切な保育、教育の場が重要である事は論をまたない。

しかし、重要性が以前から叫ばれているにもかかわらず、本格的な取り組みが各地で実施されたのはごく最近のことであり、まだまだ多くの不十分な点が残存しており、今後の課題であろうと考える。

試みに、この一年間に出版された関連雑誌の一部を検討してみると、「精神薄弱児研究¹⁾」1973年8月号において“幼児問題”が特集としてくまれ、「ちいさいなかま²⁾」1973年12月号の特集が“これからの障害児保育をもとめて”であり、「みんなのねがい³⁾」1974年2月号において“障害をもつ幼児の発達と保育”が特集としてくまれている。これは、最近における障害幼児との取り組みへの関心の深さと、問題の重大さを示す一つの事実であろうと考えたい。

活発な取り組みを行なっている一つの例として、東京における「障害をもつ子どものグループ連絡会」のあゆみに基づいて考察していきたい。ここでは、“障害児の早期治療、早期教育は依然として保障されていないのが現状です。子どもは日一日と成長します。このことは障害児には一層重いひびきをもつことで、まさに放置できない状況といえます。……そこで、子どもの成長発達をなんとか保障したいという止むに止まれない親の気持から、都内各地に親が自主的に障害児のグループをつくり、非常に困難な状況をのりこえて保育をはじめました⁴⁾”。そして、1972年末の調査では、都内に61ヶ所ものグループがあり、そうしたグループの特徴的な動きとして、“第一に公立化がすすんできたこと、第二に一般の保育園、幼稚園で障害をもつ子どもの保育、教育をはじめ、都の助成金をうけるところができたこと⁵⁾”であると述べている。

こうした東京における先駆的な取り組みは、やっと一歩足を踏み出したにすぎないであろうし、他の多くの地域においても多かれ少なかれ類似の動きが出てきていると言えよう。

こうした障害幼児との取り組みへの気運が高まる中で、厚生省は、昭和47年度より「心身障害児通園事業補助金」を予算化し、さらに、昭和49年度から全国で20ヶ所の保育所を指定し、一ヶ所に8人程度の障害児を入所させて保育するという事を試験的に実施する方針を打ち

* () 内の数字は、末尾の「文献」の数字と一致するものである。

出した⁶⁾。

また、最近の重要な動きとして、昭和49年4月の通達によって、精神薄弱児通園施設への入所対象児童の年齢制限（従来は満6才以上）が撤廃されたという事があげられる。この事は、通園施設の役割を“早期療育の場”として実質的に位置づけていこうとするあらわれと言えよう⁷⁾。

(2) 一般保育の場におけるうけとめについて

ここでは、一般の保育園、幼稚園における障害幼児のうけとめの問題について考察していきたい。

長瀬(1973)⁸⁾は、“心身の発達になにかの障害をうけている子どもたちを幼稚園や保育園において一般保育に参加させた方が、障害児だけのグループの中で保育するよりも、発達をより促進させ、しつけの面においてもより効果がある”との考えに立って、かかわりをもった子どもたちの実例を紹介している。そして、“一般保育の場に障害児を受け入れることについては、地域に住むひとりひとりが理解を持たなければ、そのことの実行を支える真の力は生れて来ない”としている。

宮下(1973)⁹⁾も、多くの経験をする中で、障害幼児にとって“「みんなといっしょ」の場作りが基本であり、第一にとられる方策であるという考えが強固になってきた”と述べ、しかしそれが“障害をもつ幼児の対策のすべてではないこと、他のさまざまな方策とのネットワークの中で有効化すること、また、幼稚園や保育園の保育をよりゆたかにすすめる条件作りの中でのみ、それが実現されること”を説いている。

さらに、1973年11月の中央児童福祉審議会の中問答申「当面推進すべき児童福祉対策について¹⁰⁾」においては、“障害児を一般の児童から隔絶することなく、社会の一員として、むしろ一般の児童とともに保育すること”によって、障害児自身の発達及び一般児童の人間としての成長可能性が促進されるといったことが幾つかの実践例で示されているとされ、こうした認識に基づいて、“障害児の受け入れに必要な諸条件を整えて、保育に欠ける障害児の保育が実施できる方策を具体化することが必要である”と述べられている。

次に、こうした理念に基づいての実践的な取り組みについて、若干ふれていきたい。

大津市では、1973年4月に、何らかの障害をもち、早期からの保育を必要とする子どもで、父母が入園を希望した66名の幼児全員が市内の幼稚園、保育園に入園し、それに伴って市当局による、各園に保母一名増員する事、補助金を出す事などの施策が実施された¹¹⁾。そして、“この子どもたちが入所した事によってさまざまな問題が提起されたが、その一番大きな問題、それは「保育とは何か」という根源的な問いが、保育実践の中から今一度投げかけられてきたということである¹²⁾”と言う。

調布市においても、1972年7月から、市立M保育園の4・5才児のクラスに二名ずつ計四名の障害幼児を正式に入園させ、障害児担当の保母を各一名とフリーの保母を一名増員させている¹³⁾。

横浜の「土と愛子供の家保育所」は、障害児を“地域社会の子供の交わりの中で育てていく実践運動としての保育所づくり¹⁴⁾”の運動を何年間も進めてきて、1974年4月に、60名の子どもの中に心身障害のある子ども7名を含めて開園された保育所である。ここでは、“心身に障害を持つ子どもが、一番そのハンディを克服しやすい保育園や幼稚園の段階で、障害児といわ

れる子どもを受け入れ、積極的に保育しようとするところは皆無なのです。保育所は「良い子」だけを育てるところであってはならない¹⁵⁾」との考えに立って、“障害を持つ子もいっしょにすごす”という統合保育を確固とした原点にすえて実践していこうとしている。

東京の杉並教会幼稚園においては、8年程前から自閉的傾向の強い子供をうけとめてきていると言う。当初は、そうした子どもの動きの異質性に啞然とさせられたが、うけとめていく中で、“私たちはその驚きを、彼らの異質性に向けるのではなく、保育の基本姿勢に批判を加えていくこと”とし、“子どもが固有にもっている性格差、発達差に即応して保育に当てよう心がけた。自閉児たちもこうした差の問題として扱えていくように努めた¹⁶⁾”としている。そして、フリーの保育者を置き、自閉児もクラスの一員として位置づける中で、これまで10名以上の自閉児を受けとめ、大きな成果をあげている¹⁷⁾。さらに、ここでの実践を足がかりにして、都内の保育関係者を中心として、1971年に「東京都情緒障害児保育研究会」を結成し、情緒障害児(自閉児)をできる限り、一般幼稚園、保育園での保育を必要とする子として受け入れていき、共に育ち合っていこうとする方向に立って実践と研究を深めているのである¹⁸⁾。

以上、一般保育の場における実践的な取り組みのいくつかについて述べてきた。この他にも、各地域で、種々の問題をかかえつつ、多くの取り組みがなされてきている事も忘れてはならないと考える。(例えば、池(1974)¹⁹⁾、四津谷(1973)²⁰⁾、岩谷(1974)²¹⁾、米山・古山(1973)²²⁾、塩川(1974)²³⁾、小島(1974)²⁴⁾、飯野(1973)²⁵⁾など)

筆者(加藤)も、これまで述べてきた一般保育の場での障害幼児の受けとめの方向を基本的に支持したいと考える。それは、(イ) 障害幼児の発達にとって、一般幼児と共に育ち合うことは大きな意味がある、(ロ) 一般幼児にとっても、障害幼児と接する中で、人間存在の多様性を認識し、差別的、偏見的な見方をなくしていく為の一助となりうる、といった視点に立って考えていきたい。筆者(加藤)らの取り組みは、未だスタートラインに立ったにすぎないが、あくまでも“子どもにとってどうなのか”といった視点を忘れずに、一歩ずつ進めていきたいと考える。(加藤)

II. 方 法

1. 時 間

昭和48年7月7日から昭和49年3月23日まで継続された。毎週火曜日と土曜日の午前10時30分から午後12時30分まで2時間であり、合計50回にわたるグループ指導がもたれた。

2. 場 所

岩手県中央児童相談所内において実施。子どもグループは「子どもの部屋*」と「うんどうの部屋**」、母親グループは「母親面接室」を使用

* 33 m² (5.8×5.8) の広さ。水あそび場、レコードプレーヤー、イス、テーブル、整理棚、オルガン、白板、一方視鏡、カメラが常備。遊具、教具類は必要に応じて持ちこまれる。

** 33 m² (5.8×5.8) の広さであり、「子どもの部屋」と隣接。トランポリン、ファニートンネル、平均台(2)、ワゴン、鉄棒、つり輪、はん登棒、マット、ママゴトセットが常備されている。

表1. 対象児童の概要

氏名(性別)	K. M (女)	R. M (女)	S. Y (女)	M. S (男)	K. Y (男)	T. H (男)	H. Y (男)
生年月日	S.44.7.	S.44.8	S.44.8	S.44.4	S.44.3	S.44.6	S.44.6
遅滞の程度及び原因	<ul style="list-style-type: none"> ・中度の遅滞 ・鈴木ビネー式 I Q 65 (S48.11.児相にて) ・単語のつなぎによる会話可能 ・医学的異常所見なし (2才, 3才時検査) 	<ul style="list-style-type: none"> ・中度の遅滞 ・単語をいくつか言う ・医学的異常所見なし (3才時の検査) 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽度の遅滞 ・鈴木ビネー式 I Q 80 (S48.11.児相にて) ・意 現可, 構音障害 ・医学的異常所見なし (1才, 2才時検査) 	<ul style="list-style-type: none"> ・重度の遅滞 ・ことばなし ・脳波異常 抗てんかん剤服用 	<ul style="list-style-type: none"> ・重度の遅滞 ・ことばなし ・在胎7ヶ月早産 	<ul style="list-style-type: none"> ・重度の遅滞 ・単語数語 ・脳波異常 抗てんかん剤服用 	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉的傾向 ・会話困難 ・4才0ヶ月時, I 病院小児科で「自閉症」と診断
問 題 点	不活発, 動作緩慢 身辺処理未自立	情緒不安定 身辺処理未自立	消極性	多動	分離不安 固執傾向		自閉性
発達指数及び輪郭	DQ. 43	DQ. 56	DQ. 78	DQ. 34	DQ. 44	DQ. 41	DQ. 70
36 30 24 21 18 15 12 運操大子食排生理言 動作人供事泄活解語 (1)(2)とと(5)(6)習(8)(9) のの 慣 交交 (7) 涉涉 (3)(4)	(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)	(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)	(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)	(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)	(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)	(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)	(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)

注 1) グループ指導開始時点における概要である

注 2) 医学的所見は, 母親からの情報にもとづく

注 3) 発達指数及び輪郭は, 「津守, 稲毛の乳児精神発達質問紙 1~3才まで」によるものであり, S 48.7 に実施されたものである。

3. 対象

子どもグループの対象児童は、表1に示されるとおりであり、女兒3名、男児4名の計7名である*。(但し、H.Y.は9月より中途参加)

母親グループは、対象児童の母親7名である。

4. 担当者

子どものグループ指導にあたっては、7名の子ども担当者が夫々の担当児童をうけもつという担当制をとった。

担当者は、インテイクによる資料と初顔合わせの会(昭和48年6月30日)で得た観察結果をもとにして、次の如く決定された**。

(1) K.M; 栗生沢, (2) R.M; 根田, (3) S.Y; 藤原, (4) M.S; 宮本・斉藤, (5) K.Y; 加藤, (6) T.H; 長谷川, (7) H.Y; 長谷川。

母親グループの担当者は、湯沢と高瀬である。

5. 各回のスケジュール

子どもグループの一日のスケジュールは、表2に示されるとおりである。原則的には表2に示されるとおりであるが、グループ全体の状態、個々の子どもの状態を中心にすえて、柔軟性をもって対処された。

母親グループは、子どものグループ指導と平行して話し合いの場をもっていった。

表2. 子どもグループの一日のスケジュール

時 間	場 所	項 目	内 容
10.30	子どもの部屋	集 合	
10.30~10.50	子どもの部屋	生 活 指 導	スモックに着換え、あいさつ 点呼、歌、出席シールはり
10.50~11.10	子どもの部屋	課 題 設 定	紙、絵具、クレヨン、のり、ねんど、等々を素材に しての、みんなでまとまった遊び、仕事。
11.10~11.20	子どもの部屋	リ ズ ム	レコード、オルガンに合わせてのリズムあそび。
11.20~11.50	うんどうの部屋	自 由 あ そ び	
11.50~12.30	子どもの部屋	生 活 指 導	用便、手洗い、食事、かえり支度、あいさつ
12.30		解 散	

* この他に、普通児と交わる機会を与えたいという意図で普通児 I.U (3才) を月に数回参加させた。

** 宮本の健康上の都合により、中途より M.S 担当は斎藤に変更した。又 M.S, K.Y, H.Y の担当者は、グループ開始前からの治療的かわりをもっていた者でありそのまま継続された。なお、宮本、長谷川、斎藤は心理判定員、高瀬はケースワーカーである。

6. 担当者のかかわり方

(1) 子どもグループにおけるかかわり方

担当者、スケジュール等について前述したが、そこにおけるかかわりの持ち方についてふれたい。(i) 基本的には、個々の子どもの発達課題を的確にとらえるべく努め、子どもの自発性を大切にして伸び伸びとした自己表現が促されるように心がけた。(ii) そこにおいて担当者は、子どもの遊びの幅のひろがりや対人関係のひろがりのための手伝い役として参加した。(iii) 基本的生活習慣の指導や課題設定場面においては、子どもの発達段階をふまえつつ、やるべき事はきちんとやらせ、できるだけ一緒に参加するという方向での指示的なかかわりが持たれた。

(2) 母親グループの持ち方。

基本的には、自由な話し合いの場を持ち、自然に出されてくるテーマを話題として話し合っていた。〈宮本〉

III. 経過とその考察

1. 子どもグループの経過とその考察

はじめに7人の子ども個々の経過と考察を述べ、次に子どもグループ全体の考察を加えていきたい。

(1) 個々の子どもについて

ここでは、7人対象児童について、グループ指導に参加するまでの経過と参加後の経過と考察を加えていくことにする。

(i) K.M(女)

① 生育歴

妊娠、出産順位ともに1番目。9ヶ月早産で吸引分娩であった。出生時体重は2,650g、混合栄養により、身体的発育状況は順調であった。首の坐りは4~5カ月、始歩・発語とも1歳半を過ぎてからで、母は発育の遅れを心配していた。保健所の乳幼児健診や三歳児健診で専門医のところを受診するようにすすめられた。I病院で2歳3カ月に初めて受診し、3歳6カ月時には、スピーチ・クリニックで検査を受けた。医学的所見は単に知能が遅れているだけで、医学的処置は要らないと言われた。

家族は4人で、父(32歳*)は大工、母(27歳)は本児と妹(11カ月)の育児に専念している。本児は出生後、現在まで、家庭保育のみで育てているが、いろいろな施設に問いあわせて、児童相談所の存在を知った。

② インテイクでの様子

昭和48年4月10日にはじめて児童相談所を家族4人で訪れた。当初、両親はI病院での検査の結果「ちえ遅れ」と診断されたことでこのまま家庭保育だけで成長することに、不安を覚え、同じような子どもが大勢いる収容施設(知り合いの子が入っている精神薄弱児施設を指向)で、訓練を受けさせたいと希望していた。

* グループ指導開始時点での年齢を指す。以下すべて同じ。

これに対し、児童相談所では、施設収容の決定は、将来学令に達するまで保留し、幼児期は、あくまで在宅のままとするが、両親の抱いている不安感の解消をはかり、家庭に閉じこもったままでの母親との依存関係を打破すべく、地元で集団保育の場を獲得するまで、児童相談所で集団的治療状況を与えることにした。

本児の状況は、頭が大きく、目の焦点がはっきりあわないのが、気づかれる特徴であった。人みしりするが、しばらくすると慣れてくる。言葉は単語のみで、不明瞭な発音をしたが、慣れてくると担当者の質問にも耳をかすようになった。描画は錯画の段階。

③ グループ指導の経過とその考察

グループ指導における経過について、表3にまとめた。

ここでは、本児にとって一番特徴的な緊張の強さ、動作の鈍さといった点について、考えてみたい。

本児は、新しい場面に対して非常に抵抗を示し、緊張する傾向が強い。新しい遊具が加わると、緊張して動きが鈍くなったり、慣れてきて比較的スムーズにやれるようになった遊びも、しばらく中断した後、再びさせようとするとき身体を硬直させて、他者のすぐ後でなければ、やれなかつたりする事もみられた。

言語面においても、突然“おはよう”と声をかけられると、スラスラ言葉が出なくなりあいさつを返せず終ってしまうという事もみられた。

また視線においても、緊張するためか、視線をスムーズに左右上下させず、顔全体を急激に動かす事が多く、他者や物への注視もやらず、T.*の指示によりやっと視線をむけるという具合だった。

こうした緊張の強さ、動作の鈍さ筆は、場面への慣れにより、部分的には薄らいできたが、本質的には大きな変化はみられなかったと言えよう。

このような傾向は本児の器質的な障害に基づく特徴的なものであろうし、更には、失敗する事によって緊張し、その動作をさげようとしたり、他者のあとについて真似をする事が多くみられるような失敗回避傾向の強い、性格的なものも加わってあらわれるものと考えられる。

しかし、本児は音楽（特に、知っている音楽）に対してのみ、非常に敏感でリズムカルな動きを示し、いつものスローテンポな本児からは考えられない程である。

グループ指導の中で、身近生活については根気よく本児がやるのを待ち、できるだけリラックスした雰囲気の中で他児との交流、課題（ハサミの使用等）を設定して、能力の開発等を心がけ、表3に示されるように、本児なりに伸びを示したが、これまで述べてきた緊張しやすさ、動作の鈍さ等については、本質的な変化をみるまでにいたらなかった。これは今後の課題であろうし、音楽に対するリズム感等のよさを有効に使っての音楽療法的なアプローチも考慮されうると考える。

現在本児は、〇幼稚園にこの4月から通園し、緊張はしていたが、他園児から手伝ってもらいながら、とけこみつつある。(栗生沢)

(ii) R.M.

① 生育歴

* T.とは、子どもグループの担当者を指す。但し、特定の子どもの特定の担当者は“担当 T.”と略し、特定でなく一般的に担当者を示す時は“T.”と記述していく。以下すべて同じ

表 3. K, M の

	こ と ば	生 活 習 慣	あそび・行 動
7月	<ul style="list-style-type: none"> 口を十分に動かさず不明瞭な発音(例「オイチカッタ」) いやな時は「イヤイヤイヤ」と言って体をそらす。 	<ul style="list-style-type: none"> スモックの着脱は可, ボタンはさわるだけでできない。 靴を自分からぬいだり, はいたりせず, T.の 介助を待っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 動作は鈍く, ちょっとした事ですぐ緊張し, 体を硬くする。 トランポリンやファニートネルに興味は示すが, すぐにはやり出さない。 新しい遊具が入ると緊張して動きが鈍い。
8月			
9月	<ul style="list-style-type: none"> 大声で「オハヨー」とあいさつ。 ファニートネルをのぞき, 「オイデ」という。 男の子は皆「ケンチャン」とよぶ。 黄色→「キイオ」, お友達→「オモトグチ」, たくちゃん→「バクチャン」。 	<ul style="list-style-type: none"> ボタンをひっぱって, はずそうとする。 靴に手をそえるが, 自分からはく気なし。 弁当は他児に気をとられ, あまり食べない。 	<ul style="list-style-type: none"> 集中して遊べる時間が少しのびる。 お弁当やピンポン体操の時は, 活発になる。 新しい環境に入る事をいやがる。 突然フワーとたおれる事が数回あり。
10月	<ul style="list-style-type: none"> R.M(女)に髪の毛をひっぱられ, T.のまねして「ゴメンナサイ」と言う。 弁当のふたをあけて「ワァ」と叫ぶ。 りはる→「リアウ」, しずちゃん→「シジイチャン」。 	<ul style="list-style-type: none"> 靴に足を入れて, T.の助けを待つ。 アメのつつみ紙は時間はかかるが, とれる。 ハシ入れに自分でハシを入れる。 声のする方向をむかずにあいさつする。 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> 10まで数えるが, 物と対応していない。 「アノネー」をくり返している。 蝶々→「トウト」。 		<ul style="list-style-type: none"> 平均台の上を歩いて遊ぶ。 「カゴメ」で鬼になる事を初めは拒否するが, 次第にやれるようになる。 ファニートネルを何度も抵抗なくくぐる。 ワゴンにのると活発になる。
12月	<ul style="list-style-type: none"> あいさつを返せずに緊張する。 「タイソウダゴ」と言う。 弁当のふたをあけて「オイシソウ」という。 自分の事を「マエタワクミコヨッツ」と言える。 ワゴンにのり「ドウチエンヨドウチエン」(幼稚園の事)という。 「オカータンノオウチ」。 	<ul style="list-style-type: none"> 長靴は一人ではける。 まだ, Tの介助を待っている事が多々ある。 	
1月			
2月	<ul style="list-style-type: none"> カゴメをした時, 目かくしをとって「オネーチャン」という。 「バスヨバス」, 「イヤダ」, 「イコーカ」, 「シジュチャンオハヨウ」等という。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の靴がわからず, 足をあげてTの助けを待つ。 ボタンはTが半分手伝うと自分で出来る。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊んでいた遊具を他児にとられないようにする。 課題やお弁当に, すぐあきてしまう。気が散りやすい。
3月			

変化

対人関係	課題	運動能力
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 担当Tとの結びつきが強い。 ◦ 他児への接近は、あまりみられない。 ◦ 箱車に一人ずつのせて引いていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 「あつまり」の時、皆の前に出る事をいやがる。 ◦ 指示がないと、動作にうつていかない。 ◦ 自分のやる作業を注視しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ トランポリンで、とほうとしても足が離れない。 ◦ 20cm位の高さからなら、Tが手をそえると飛びおられる。 ◦ 低い平均台の上は歩けない。 ◦ ピストルの引金はひけない。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ S.Y(女)と一緒にK.Y(男)を追いかけていく。 ◦ 担当T以外のTとの結びつきもつよくなる。 ◦ 他児の真似をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ハサミはうまく使えない。 ◦ 三種はめ板は2回目に来れる。 ◦ カードの色の弁別はできない。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 絵画は同じ所だけぬりつぶす。 ◦ Tの指示がないと、やろうとしない事が多い。 ◦ クレヨンをわたすと元気がなくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ トランポリンで少し飛べるようになる。 ◦ ワゴンに一人でのぼれず、おりれない。 ◦ 平均台では足元をみずに歩き、ずれてもそのまま進む。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 他児と長く手をつないではおれない。 ◦ 入室した人に、すぐ注意をむける。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ハサミを使えるようになる。 ◦ 円は書けるが角はかけない。 ◦ イスにはちゃんと座っておれる。 ◦ 紙粘土にさわるのをいやがり“オシッコ、”といって逃げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ トランポリンのはねるが上手になり、ひざをつかって、両足ではねる。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 他児の動きをみつめ、遅れながらも真似てついていく。 ◦ S.Y(女)の休んだ事に気がつく。 ◦ Tの後について歩く事多し。 		

- ・ 出生児体重 3,300 g。無痛分娩にて出生。人工栄養のみで養育された。乳児期の体重は標準以下であり、母の言では虫が強くて大きくなれなかった。父 32 歳，母 29 歳の時出生。
- ・ 1 歳の誕生日に段階からころげ落ち頭部を打つ。(意識障害については不明)
- ・ 生後 11 カ月頃から 3 歳頃まで夜泣きが続いた。
- ・ 2 歳半頃になって発達の遅れに気づき，I 病院にて脳波測定，手根骨レントゲンを受ける。異常所見はなく，「知能の遅れによるものだろう」と診断されている。
- ・ 父は公務員。アパート式の公舎に居住。家族は父・母と 1 歳になったばかりの妹がいる。

② インテイクでの様子

昭和 48 年 3 月 12 日，母と本児来所。三歳児健診でことばの遅れを指摘され，児童相談所を紹介された。

判定員には初めから顔見知りすることもなく，手をひっぱったり，しがみついたり，愛敬をふりまき，常にニコニコしている。

発声は頭のとっぺんから響くようなキーキーという金属音で，“オジィチャン”“オバアチャン”という単語を発する。(但し，検査者の太い声をも模倣できる)

“Rちゃん”という呼びかけには，反応はなかなか得られず，声をかけてもふり向かない。頬をおさえてこちらを向かせても焦点が合わず，ケラケラと笑うのみである。

プレイ・ルームで選んだ玩具はピアノ・ままごと。ごく簡単なままごとあそびができる。うるさく動きまわるが，脳損傷のような印象とは異ったものである。

③ グループ指導の経過とその考察

本児のグループ指導における変化を表 4. に示した。本児は，グループ指導の期間中ずっと，シールはりのとき，後ろをふり返っては皆の顔を見，なかなかはろうとせず，「皆，Rちゃんのことを見ていますからね」という T. たちの声に，やっと落ちつき，はろうとするという状態が続いた。

こうした T. の注目を自分に集めていたいと欲求は，表 4. に見られるように，プレイ開始の 7 月には，T. に無理やり抱きついて離れないとか，頻繁に奇声を上げる（その時，頭を激しく振り，あるいはそのまま走りだすということも見られた）という行為となり，10 月頃からは，他児への攻撃という形で表わされた。他児を攻撃するときは，むやみにやっているのではなく，自分が 1 人ぽっちになった状態のとき，もう 1 人の子の周りに T. が集まって世話をしていたとか，本児といっしょに遊んでいた T. に他の子が近づいて来た時であり，急に髪の毛をつかみ，グイッとひっぱって，時にはころばしたりすることも見られた。そして，ある T. に叱られるとすぐさま別の T. の所へ甘えてすり寄って行くとか，手を顔にあてて泣き声をだす「泣きまね」行為が見られた。

また，本児は感情の起伏がはげしい方で，場の雰囲気作用されやすかった。例えば，見知らぬ子や見学者が入ったときは，落ちつきをなくして，ふだんできる事でもやれなくなってしまった事などがあった。

しかし一方，インテイクでの様子にもあるように，顔見知りすることがなく，たいそう愛敬のある子で，他の子には無関心な子の多かったこのグループの中にあっては，他の子への働きかけという点で非常に大きな影響を与えた存在であったと言える。

本児の場合，知的理解の度合が劣ることから，さまざまな困難が生じていることは否めない

が、発達の度合いのアンバランスな面や、情緒的不安定さは、母親の養育態度と関係しているのではないかとと思われる。「下手に手をかけない方がよい」という母親の言葉であるが、本児にはもっときめ細かな世話が必要であり、感情的にも安定した、一貫した養育態度でのぞむことが、さらに本児の安定と成長につながるものと思われる。

現在、本児は一般の幼稚園に通っているが、言葉もふえ、お話の本を覚えて絵をみながら言ったり、話す事柄もしっかりしてきており、本児なりに新しい環境に適応してやりつつあると言える。今後問題となるのは、むしろ知的発達遅滞ではないかと思われる。(根田)

(iii) S. Y (女)

① 生育歴

- ・出生児体重 3,300 g。出産予定日を誤算して1ヶ月早く入院。陣痛促進剤によって無理に陣痛をおこしたが生まれず1ヶ月後に出産。
- ・始歩は1歳8ヶ月。足腰が弱く2才時にC病院とN病院で諸検査を受けたが、どちらの病院でも、身体には異常がなく、知恵が1年ぐらいいくれているのではないかとと言われる。
- ・家族は、父(サラリーマン)・母・姉(小学1年)と本児の4人

② インティクの様子

- ・児童相談所とのかかわりは、昭和47年5月8日にC病院小児科からの知能検査依頼で訪れたのが最初である。
- ・昭和48年5月10日にグループ指導を開始するに当たってのインティクを行ったがその折の様子は次のとおりである。
一抱きあげると初対面の面接者の胸にべったりと顔をおしつけ、おとなしく抱かれたままになっていた。プレイルームでは、しばらくピアノやままごとなどでおとなしく遊んでいたが、時間がたつにつれて、表情が生々としてきて、高く積みあげた積木をそうじセットのほうきで思いきりたたき倒すというような遊びを10分ほど続けた。自分から話しかけるということはほとんどなく、問いかけられれば小声で返答するが発音が不明瞭でよく聞き取れず、やっと「サ行」が「タ行」に発音されるのを確かめられた程度であった。口よりも身ぶり、手ぶりで意思表示をすることが多く、問い返されると口をとじてうつむいてしまうなど、「言葉」に関してはかなり敏感に反応した。自信なげで消極的な性格のように思われた。—

③ グループ指導の経過とその考察

表5に見られるように、行動の変化と言語や対人関係の間には、かなりの関連があることがわかる。グループに参加したばかりの頃は小さな声でもごもご話すだけで何を言っているのかさっぱり聞き取れず、問い返すと同じことは2度と言おうとしなかった。歌や遊戯の時も、声を出して歌うことはなく、T.の動作を模倣するだけであった。対人関係においては受身的な行動が多く、他児のされるがままになっており、T.が指示を与えない限り、同じ行動や遊びをいつまでも続けていることが見られた。

9月の初旬に姉がグループ指導の時間にいっしょに加わったときから、本児の行動が変わってきたように思われる。つまり、この頃から言葉の数も増え、声も大きくなり、他児に積極的に働きかけるようになるなど、対人関係においても成長がみられてきた。行動も徐々に活発になり、次第に自分の主張をはっきり示すようになった。

表 4. R.M の

	こ と ば	生 活 習 慣	あそび・行 動
7月	<ul style="list-style-type: none"> ◦「ギャッ、」といった奇声を発する事が多い(楽しい時, こわい時, 不満な時) ◦言語不明瞭だが盛んに話す(オジチャン, コッチ, ダメ, バイバイ等) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦着脱は, やろうとするが, まだTの介助が必要。 ◦手が汚れると, 自分で洗っていく。 ◦排泄は, ほぼ自立。 ◦ズックは, うまくはけない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦遊具を独占したがる。 ◦殆んどの遊具を使ってあそべる。 ◦ままごとが好きで, よくやる ◦他児の動きをよく見ており, 模倣する。 ◦行進はTに手をとられて歩く。
8月	<ul style="list-style-type: none"> ◦「コレワ? コレワ?、」という問いを盛んにTに発する。 ◦不快・拒否の意志伝達として盛んに「バイバイ、」をつかう ◦名前を呼ばれ, 時々すぐに「ハイ、」と返事できる。 		
9月	<ul style="list-style-type: none"> ◦「借して、」→「カッテ、」, 「ごはん」→マンマ, 「肉、」→「オクッティ、」 	<ul style="list-style-type: none"> ◦スモックのそでを一人でおせる。 ◦弁当は, はしを使って上手に食べる。 ◦ボタンのはめはずしは, うまくできない。 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ◦言語と行動の一致がみられてくる。 (例: 妹がころんだ時「イタイ?、」, 「ハイドウゾ、」といって他児に切符を配布, 粘土をまるめつつ「コロコロ、」と言う, ・絵具で汚れた時「アカチャン バッチィ、」, ・弁当の折「ギユウニユウ, パン, オチャ、」と言える) 		<ul style="list-style-type: none"> ◦Tの指示により, 切符やお菓子を他児に配布して歩く。 ◦他児とワゴンにのったり, トランポリンを共にやる。 ◦「カゴメカゴメ」で, 一人で見かくして鬼になるが, すぐ見かくしはとってしまう。 ◦レコードに合わせての行進で他児, Tについて走りまわる
11月	<ul style="list-style-type: none"> ◦名前よぶと, 小声で返事する 	<ul style="list-style-type: none"> ◦スモックを一人で脱げる, ボタンはうまくはずせない。 	
12月			
1月	<ul style="list-style-type: none"> ◦「キー、」「キャー、」といった奇声を発する事がめっきり減少。 ◦二語文が出てくる。 (例: スナ チョウダイ) 		<ul style="list-style-type: none"> ◦ままごとをTとやりとりして遊ぶが, 他の子とはやれない ◦遊具を独占したがる傾向は残っている。 ◦ピンポンパン体操で, 他者の動きをよく見ていて, ワンテンボ遅れて, 出きる場面がふえる。
2月	<ul style="list-style-type: none"> ◦ままごとで「ドウゾ、」といって, やりとりできる。 ◦名前よぶと小声で返事する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦スモックの着脱は, ほぼ自立(ボタンのみが, あと一步ではずせる) ◦ズックを自分ではける。 ◦手洗いの順番を待てるようになる。弁当も他児のそろうのを待てる。 	
3月			

変化

課題	対人関係	情緒安定度
<ul style="list-style-type: none"> ◦じっとイスに座っておれない。 ◦シールはりは出さない。 ◦色紙にのりづけして、つなぎ合わせることは、やれない。 ◦行進はTに手をとられて歩く。 ◦ハサミは両手でもって押し切るようにする。 ◦紙芝居に熱中する。(初めての物への興味, 関心強し) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦M.S(男)に関心を示し, 積極的に接近していく。 ◦他の2人の女の子にはあまりよっていかず, T.H(男)にはこわがって攻撃的になる。 ◦Tに甘えて, ベったりくっついていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦落ち着きがなく, 自分勝手に独占したがる傾向が強い。 ◦皆の注目を集めていないと, かんしゃくをおこし, ヒステリックになる。
	<ul style="list-style-type: none"> ◦T.H(男)に対して積極的な拒否反応を示す。 ◦Tを独占したがる。 ◦妹及びK.Mの妹をいじめる。 ◦S.Y(女), K.M(女)の髪の毛をひっぱりにいき, Tに叱られると泣き出す。 	
<ul style="list-style-type: none"> ◦指示すれば, イスやテーブル運びを手伝う。 ◦絵画には, 集中して参加するようになり, クレヨンの片付けもできる。 ◦ハサミで切ること面白さをみい出している。 ◦歌をうたっている時は, ともかくイスにすわって参加できる。 ◦粘土は, にぎりつぶしたりするのみで, 型づくりはできない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦H.Y(男)がTに甘えていると髪の毛をひっぱり, 押ししたりして, H.Yをととも気にし出すようになる。 ◦Tに注意されると, 泣き出す。 ◦T.Hの髪の毛をひっぱり。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦弁当のあと, ふざけたり, 笑い出したりして興奮状態になる事がある。 ◦興奮しやすい。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ブロックの組み立てに関心示さない。 ◦「げんこつ山のたぬきさん」では, 最後の手を前につき出すところだけをやるのみで, まだ中はやれないままである。 ◦歌や遊ぎではワテンポ遅れつつ, 所々でまねてやる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦見しらぬ大人が入ると気が散りやすく, 近づいて甘える。 ◦弁当の時, K.Y(男)がほしがると自分でミカンをかくす。 ◦他児との交流も少しずつふうて一緒に遊ぶ機会もふえている。 ◦Tの指示がきけるようになり, イスから立ち上って歩きまわる事も少なくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦見しらぬ人が入室すると, 興奮し, 情緒不安定になる。
		<ul style="list-style-type: none"> ◦周囲の注目を自分に集めたくて騒いだりすることは相かわらずあり。

表5. S.Yの

	こ と ば	生 活 習 慣
7 月	<ul style="list-style-type: none"> ◦声が小さい。聞き返すと同じ事を2度といわない。 ◦名前を呼べば返事はするが、小さな声。 ◦構音が未発達。(例)リンゴ→ンゴ、オカアサン→ダッチャン。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦初めから、食事、着脱はほぼ自立。 ◦おしっこする時、パンツを十分下までおろせない。水洗のレバーをうまくおせない。
8 月		
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ◦「ニャンコ イナイ」、 「ネッチャン ガッコ」、 「イヤーマイッタ マイッタ」、 「ドウモシンスレイ」等のことばあり。 ◦「オハヨウ」とはっきり言える。 	
10 月	<ul style="list-style-type: none"> ◦元気よく「ハイ」と返事できる。大声で叫んで返事する事もあり。 ◦「ダッチャン」を「カアチャン」と言えるようになる。 ◦「チッチ」を「シッコ」と言えるようになる 	
11 月		
12 月		
1 月	<ul style="list-style-type: none"> ◦ハッキリと自然に「ハイ」と返事できる。 ◦大きな声で話すようになり、はっきりと意思表示する。大声で歌う。 ◦発音がはっきりしてくる。まだ助詞はつかえない。 	
2 月	(例) 「ワタシ ヨウチエン イクノ、 「コレ カッタノ。」	
3 月		<ul style="list-style-type: none"> ◦排泄、食事、着脱等は、ほぼ完全に自立。

変化

あそび・行動	対人関係	課題
<ul style="list-style-type: none"> ◦非常に内気、消極的な動きが目立つ ◦遊具は何でも使って遊べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦本児の方から寄ってくる事はなく、受身的。 ◦Tに甘えてべったりくっつく。 ◦M.SやT.Hがそばに来ると、いやがる。 ◦姉に世話されるままになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦シールはり…自分のシールはとれるが、はる場所は、わからない。 ◦絵画…余白があるのに、1ヶ所にだけ何色かを重ねてぬりつける。 ◦ハサミ…うまく使えない。
<ul style="list-style-type: none"> ◦活発さはなく、他児の動きをみている。(但し、姉がいると元気になる) ◦つり輪が気に入って、何度もつかまる。 ◦戸外ではブランコやスベリ台で楽しくあそぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦T.Hに髪をひっぱられてから、近づいてくると泣きそうになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦はめ板(三種、四種共)ができる。 ◦絵画…人の顔(親、姉)をかく魚の絵に目と口をかきいれる。 ◦ハサミ…切ろうとするが、うまく切れない。
<ul style="list-style-type: none"> ◦活発な動きがみられる。他児への関心も増し、はっきり自己主張する。 		<ul style="list-style-type: none"> ◦ハサミ…一人で使えるようになる。線にそってうまく切れない。
	<ul style="list-style-type: none"> ◦他児の頭をなでに行く。 	
		<ul style="list-style-type: none"> ◦シールはり…ちゃんと正しくやれる。
<ul style="list-style-type: none"> ◦何事においても積極的な動きをみせる。 ◦集団の遊びにも積極的に参加する。ワゴン乗りが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦I.Yと共にいる事が多く、そのまねをしたりする。 ◦他児の世話をする(名前よんだ時、他児の手をあげさせに行く等) ◦Tや他児に積極的に働きかけていく。 ◦姉に世話されるのをいやがる。 	

正月休みにひき続いて病気のためしばらく休んでいたが、1月下旬に出て来た時は、以前に輪をかけたように活発に行動した。普通児 I. U (女) のやることを真似したり、他児の世話をするようになったのもこの時期からである。T. に対しても、積極的に働きかけてくるようになった。また、姉からめんどろをみられるのをいやがり、ついには姉にはっきりと「イヤ」という意思表示をして、自分で行動するようになった。

本児の問題の根底は、軽度の発達遅滞に伴う言葉のおくれであるが、言語の発達をさらに遅らせていたものは、性格面での自信のなさ、消極性であったと言える。そうした点において、本児はこのグループ指導において実に多くの変化をみせ、成長したと言えよう。それはグループ指導における受容的な雰囲気、「言葉」へのこだわりを軽減させ、自由な行動を導き、ひいては「お話し」することの楽しさを積極的に経験させる働きをしたためであろうと思われる。

本児は昭和49年4月から一般幼稚園に通園しているが、母親から聞いたところによると、最初からものおじせず集団の中にスムーズに入っていく、元気にのびのびと遊んでいるとのことである。しかし言葉の発達が他の園児に比べて劣っているので、口より先に手が出てしまうことが少なくないとのことである。(藤原)

(iv) M.S (男)

① 生育歴

- ・出生時体重は3,200g、出産時、妊娠時とも異常なし
- ・昭和48年2月にI病院で脳波検査をうけ、てんかんに似た波があるとの事で、投薬をうける。発作は一度も起していない。
- ・家族は父(公務員)、母、兄(小学校2年)、本児の4人。

② グループ指導に参加するまでの経過

乳児期の発育は良好で、むしろ兄よりもすべての面で上まわっていたが、2歳になっても「お話ができない」「呼びかけても反応がない」ことなどから心配となり、近所に住む県立聾学校の先生に相談。同先生の助言をうけて昭和47年8月に仙台のヒアリング・センターを訪れるが聴力に障害はないとの検査結果を得てくる。同年10月には、再び同先生の助言によって児童相談所を訪問。その折、担当した心理判定員は総合病院での精密検査をすすめると同時に、5回にわたる経過観察を行っている。(昭和48年3月、母親担当の判定員の転勤に伴って一応打ち切りとした。)

昭和48年5月、グループ指導参加のためのインテイクを行った。しばらくぶりの来所であるが、建物については記憶していて自らプレイルームにとびこみ、以前好んで使っていた玩具をとりだして同じ遊び方をした。「Mちゃん」という呼びかけに対しては依然として反応をみせないが、時折担当者に笑いかけてみたり、行動を模倣したりして、全く手掛りのない状態というのでなかった。自発的にえらびだす玩具は玉つきの木製時計とミニ自動車のみ。時計は片手にもって左右に動かし玉がひとつひとつパチンと音をたて、落ちるのを眺めていた。ミニ自動車は腹ばいになって車輪の動きをジーンとみつめるという遊びを飽かずに、くり返した。

ことばはなく「ウー」や「グリュグリュグリュ」という主に不機嫌のときにだす音声のみ。気に入った遊びに熱中する以外は、部屋中をとびはねたり、高い所によじ登ったり、多動の状態であった。

③ グループ指導の経過と考察

グループ指導中にみせた行動の詳細については、表6のとおりであるが、特に次の4点について述べてみたい。前半の3点は、微々たる変化ではあるが本児自身にとっては意味のあるプラスの変化についてであり、他は一向に変化することのなかった本児の特徴ともいえるひとり遊びについてである。

(i) 生活指導において効果がみられてきた。

7, 8月は生活指導や課題学習には全く無関心、スモックに着替えさせようとしても両腕をダラリとたれ下げたまま。鉛筆をもたせても指の間からポロリと落す。ぐったりとT.の胸によりかかったまま何をしてもなく、ぼんやりと過した。まるで人形を相手にしているような空しささえ感じさせた。

10月頃から、スモックを着ようとする意欲をみせ、ボタンを半分ほどかけた。また、T.の手をとってハンカチで弁当を半分包んでもらい、残りは自分で始末しようとするなど、意欲ある行動がみられてきた。

(ii) 他児の行動への関心がめばえてきた。

全く無関心だった他児の存在を意識するようになったのは7回目頃からであり、朝のあつまりの歌や遊戯の時間に他児の動きを、じっとみつめることが多くなった。体操の時間についても同様であり、T.が手をとって、リズムにあわせて動かすと、ニヤニヤされるままになったのもこの頃である。こうした状態がしばらく続いたのち、11回目の8月28日には「ゲンコツ山」の両手をぐるぐる回す動作に似た動きを、時折やってみせたりするようになった。

(iii) いろいろな音声をだすようになった。

「ウーウー」「ゴーゴー」「グリュグリュグリュ」が得意の音声であったが、次第にそれに音の高低が加わり、最終回の3月23日には「夕焼け小焼け」(グループ参加中の昭和48年10月から通園するようになった無認可通園施設Sセンターの降園時に毎日歌われる歌)に似たメロディーをひとふし鼻うたのように歌うようにまでなる。しかし、言語には発展せず、依然として無言語のまま。

(iv) しかし、自由遊びでみせる行動は依然として自分勝手なひとり遊びの域を脱していない。

自由遊びの時間となり、うんどうの部屋に入ると、他児の存在は全くおかまいなし。とび上ったり、寝ころんだり、よじ登ったりの身体を激しく動かすひとり遊びをするのみ。この遊びの量と質はグループに参加した9ヶ月間をとおして、全く変わっていない。

グループに参加させることを決定した時点において、本児についての十分な見通しをもちえなかったというのが事実である。しかし予想に反して、本児は生活指導に対してやる気をもせ始めた。予期していなかっただけに、その驚きと喜びも大きい。本児は現在H通園施設に元気に通園している。そこでの発達を期待したいと思う。(斉藤, 宮本)

(v) K. Y (男)

① 生育歴

7ヶ月早産、出産時体重1,220gの未熟児で、三ヶ月間保育器にて育つ。始歩1歳半。現在は健康であるが、身体は年令のわりには小柄である。一人っ子であり、両親との三大家族。本児の養育は母親が中心であり、父親との接触は勤務の都合上あまり多くない。

② インテイクの様子

昭和47年12月の巡回相談に“ことばがない”との主訴で来所し、その折の担当者より加藤

表 6. M.S の

	こ と ば	生 活 習 慣
7 月	<ul style="list-style-type: none"> 発声のみ。 うれしい時, "キャッキャツ" 怒った時, "グリュグリュ" "ウー" "ウツウツ" 	<ul style="list-style-type: none"> 全くやる意欲をみせない。
8 月		<ul style="list-style-type: none"> 弁当は, 初め全く食べようとしなかったが, 徐々に食べるようになる。 クツをはかせてもらおうとして, Tの手をとり足を出す。
9 月	<ul style="list-style-type: none"> Tが"バイバイ"と喋って手をふると, まねて手をふって"バーバー"という。 Tが磁石をあわせて"パチン"とやると, まねて"パチ"という。 名前をよび, 手招きすると寄ってくる。返事はしない。 	
10 月		<ul style="list-style-type: none"> スモックを着ようとする意欲がみられ, ボタンを半分ほどかける。 Tの手をとって, 弁当を半分つつんでもらい残りを自分でやる。 偏食がある。
11 月		
12 月		
1 月	<ul style="list-style-type: none"> ブロック遊びしながら鼻歌をうたう。 色々な音声を区別して出して, 感情表現する 名前をよばれると返事はしないが, 態度としてははっきり反応できる。 	
2 月		
3 月		

変 化

あそび・行 動	対 人 関 係	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 飛びはねる, 走り回るといった身体全体を使っての動きが多い。 ◦ 水道で蛇口一杯に開き, 水が排水口から流れるのをみて喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ジャンプをしてくれるTのところに, 寄って行って要求する。 ◦ R.M(女)に追いかけられたのをきっかけとして, 本児の方からもR.M(女)にキスしたりして働きかけていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 歌, 遊戯等は全くやる気なし。 ◦ のりがつくと, その感触をいやがる。
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ Tへの要求が多くなり, 不満な時は, 何かを訴えるようにまじまじとTをみつめる。特に担当Tと他のTと区別して接する。 ◦ T.H(男)に乱暴をされてからしばらく泣き, 次回からしばらくT.H(男)によっていこうとしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 少しづつ課題へのとりくみの意欲をみせてくる。 (例)・絵具をぬりつける・ハサミを使う・クレヨンでのなぐりがき・ブロックを高くつむ等。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 身体全体を使っての激しい動きは相かわらず大好きである。 ◦ オルガンやチャイムに興味を示し, 自分で音を出している。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ Tに追いかけられるのを喜んで逃げまわる。 ◦ 名前を呼ばれても返事をせず, S.Y(女)に手をあげさせてもらい, されるがまま。 	

表 7. K.Y の

	こ と ば	生 活 習 慣	あそび・行 動
7月	<ul style="list-style-type: none"> ◦ “ウ、” “ア、” 等の発声のみ。 ◦ 名前を呼んでも無反応。 ◦ Tの手をひっぱって要求を示す。 ◦ 手をあわせ、頭を下げて “ちようだい、” の動作をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ スモックに手を通そうとする。がTの介助要。 ◦ クツのぬぎ、はきは可。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 細長い棒状の物（特に男用バンド）への固執が強く、Tのバンドを盛んにほしがる。 ◦ 自発的な動きは少なく、他児の遊びを眺めている。
8月		<ul style="list-style-type: none"> ◦ おやつに参加せず、動きまわる。 ◦ ボタンのはめ、はずしはやれない。 ◦ おしっこは時間毎にトイレにつれていく。たまに、部屋の中で自分でズボンをおろしてやろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 自分から遊びをみつめて、活発に遊び出す。（トランポリン、車、ファニートンネルなど） ◦ つり輪にぶらさがったりして喜ぶ。 ◦ Tのバンドをほしがり、渡さないと最敬礼して要求する。 ◦ おもちゃを一列に長く並べたりする。
9月	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 名前を呼ぶと、時々ふりむいたり、立ちあがったりの反応がみられる。 ◦ “駄目、” “ちようだいして、” の言語指示に少しずつ従える ◦ 発声は多くなってくる。しかし有意義な言語表出はみられない。 		
10月		<ul style="list-style-type: none"> ◦ 弁当は、皆と一緒に食べようとせず、動きまわる。無理にすわらせようとしてもいやがって逃げていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ Tのバンドをほしがるが、拒否すれば、あきらめるようになる。 ◦ プランコ、スベリ台、つり輪などで喜んで遊ぶ。 ◦ 他児の特定の弁当箱のふたをほしがり、しばらく手にもつ。
11月			
12月		<ul style="list-style-type: none"> ◦ スモックを着るのをいやがり出す。 ◦ おしっこを動作でしらせるようになる。 	
1月		<ul style="list-style-type: none"> ◦ 弁当の時間、Tのひざの上で他児の食べるのを眺めている。数口食べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 身体を動かしての一人遊びが多い。 ◦ 特定のもの（電話等）をずっと手に持っていたりする。 ◦ 棚の上に登って喜ぶ。 ◦ バンドへの固執はあまりみられない。 ◦ 集団遊戯に少しずつ参加するようになる。
2月	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 名前をよぶとふりむいたり、寄ってきたりして反応する。 ◦ 要求は発声と単純な動作で、はっきり示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 皆と一緒に弁当を食べるようになる。 ◦ トイレにつれていけば、おしっこは大体自分でできる。 ◦ スモックは着るのをいやがる。 	
3月			

変 化

課 題	対 人 関 係	母子分離・表情
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 「集まり」には参加できない。 ◦ 「カゴメカゴメ」は楽しそうに参加。 ◦ シールはり、スタンプ押し、描画等は興味をもって参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 担当Tとの結びつきが強い。 ◦ 他児の遊びを眺めているのみで交渉はもたない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 母親との分離不安がつよく、三回程、母親にも同室してもらう。 ◦ 徐々に、分離させても泣き出すが、しばらくして泣きやむようになる。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 「集まり」にはすぐあきて動きまわる。 ◦ 他児の遊戯を喜んで眺める。自分からはやろうとしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 他児とトランポリンで共にはねる（平行的遊び） 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 分離不安の心配はなくなる。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 遊戯の時、動作を模倣してやる事が、時々みられる。（手をたたき、足ふみする等） ◦ 注意集中力がなく、すぐあきて他に関心がいってしまう。 ◦ 粘土で、細長い棒状をつくり、それで色々な形をつくって楽しむ。 ◦ 三種はめ板はできる。 ◦ ハサミはうまく使えない。 ◦ シールはりでは、どうにか自分のをとってはれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 集団を意識しての遊びは少なく一人遊び多し。 ◦ Tが追っかけてくるのを待っていたり、Tが無視していると、ひっぱりにきたりといったTへの接近がみられる。 ◦ S.Yがファニートネルの中で追っかけてくると、ニコニコして逃げていき、しばらく追いかけてっこをする。 ◦ 他児と手をつないで、イスからとびおる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 本児の方から、母親に手をふって分離できるようになる。 ◦ 表情が明るく、生き生きとしてくる。 ◦ 元気よい。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ ピンポンパン体操の走りまわる場面だけ、共に参加できる。 ◦ 遊戯の動作の模倣がみられる。（断続的にしかみられない） ◦ 色紙を長くのりでつなぎあわせそれをみて喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 「カゴメカゴメ」には喜んで参加し、Tや他児と手をつなぐ。 ◦ 自分の方から他児へ働きかけるという事はみられない。平行的遊びが多い。 	

に紹介があり、昭和48年2月にインティク。この頃、相前後して児童相談所に来所した。

インティクの折は、母親との分離不安が強く、T. (加藤) の働きかけに対しては泣き出して母親にしがみついでいく。T. のバンドに対してのみ強い関心を示すが、視点がぼんやりとして全体的に幼稚な印象をうけた。

そして、(イ) 全体的な発達の遅れと共に強い分離不安、不活発さがみられる。(ロ) 母親の養育態度や本児のとらえ方に問題がありそうである、との見通しに立って原則として週一回の個人プレイを昭和48年6月まで継続した(担当者: 加藤, 場所: 岩手大学教育学部内プレイルーム)。昭和48年7月から、児童相談所におけるグループ指導に参加した。

③ 個人プレイの経過(昭和48年3月~6月)

- ・ 3月~4月にかけて; 緊張感が強く、自発的な動きは非常に少ない。母親との分離不安が強く、少しでも見えなくなると激しく泣き出す。T. も早急な母子分離の方向ではなく、母親との話し合いも平行させて実施し、本児の安心感をつくり出すように努める。
- ・ 5月~6月にかけて; 泣く事はなくなり、T. への安心感も増してくるが、まだ母子分離はできない。遊具を用いてT. と遊び合うといった活発さがみられ、表情も伸び伸びした明るさがみられてくる。発声が時々みられ、“ちよだいは?” という両手をあわせて動作で示す。バンドへの固執は一貫して続いている。

④ グループ指導の経過

グループ指導の経過について、表7にまとめた。ここでは表7を参照しつつ、若干の補足を試みていきたい。

(イ) 母子分離について; ③において前述した如く、当初より母子分離は非常に困難であり、それはグループ指導開始時においても相変わらずであった。

グループ指導が始まってからは、本児の状態をよくみきわめつつ、基本的には母子分離させるといふ方向でかかわっていった。そして、一進一退をくり返しつつも、グループ指導開始後一ヶ月たった時には、ほぼ母子分離が完成し、二ヶ月後には本児の方から母親に手をふって別れるようになつてきている。

本児の母子分離にとって、グループ指導の効果といった点についてふれてみたい。つまり、他児が元気に遊んでいる様子を見たり、他児との協同あそびをこころみようとする中で、分離不安の気持が他に転化され、少しずつ薄らいでいったといった一つの大切な要因として考えたい。

本児にとって母子分離が完成した事は、一つの発達の“ふし”をのりこえた事であると考える。

(ロ) 固執的な行動傾向について; 本児が一貫して強い関心を示したのは、細長い棒状の物に対してである。バンドに対しては特に強い固執を示し、他にブロックを一列に長くつないだり、粘土や色紙を細長く作って喜んだり、蚊取線香を折って細長く並べたりといった具合で一貫している。

担当 T. のバンドを欲しがるといふ強い固執は、グループ指導が始まってからも継続していたが、徐々に T. の拒否によってあきらめるようになり、後半には殆んど固執しなくなっている。この事は、固執傾向が基本的に解消されたというよりも、遊びの幅が広まり活発になる中で代用物が多く出現し、他に転化できたからであろうと考えられる。

⑤ 考察と今後

かなりの未熟児で出産した本児は、重い発達の遅れを背負っており、今後も背負いつづければならないであろう事は敢然たる事実である。

しかし一年余の本児とのかかわりの中で、本児なりの少しずつの伸びは確かなものとして実感される。母子分離できて活発に遊べるようになった、名前をよぶとはっきりわかるようになった、動作の模倣が少しずつみられてきた等々の変化は、本児にとって大切な本児なりの“伸び”であったと考える。

本児は、今年の6月から始まった、児童相談所での新しいグループ指導に再び参加し、元気に通所してきている。

本児にとって子ども集団の療育の場はかけがえのないものであり、出きうるならば毎日通園できる場が一日も早く欲しいと思う。(加藤)

(vi) T.H (男)

① 生育歴

- ・ 出生時体重 3,200 g。吸引分娩にて出生。
- ・ 生後2カ月から1日に4~5回のけいれん発作をおこした。その頃から抗てんかん剤を服用した。(昭和48年に入ってから、ほとんど発作をおこしていない。)
- ・ 首のすわり—3カ月、始歩—20カ月、始語—24カ月。
- ・ 家族は父・母・祖母・叔母・本児の5人。

② インテイクでの様子

児童相談所には、昭和48年3月5日ことばのおくれを主訴として来所。担当した児童福祉司は無認可通園施設Sセンターを紹介しているが、I病院の主治医から週4~5日の通園は現段階では無理であるとさしとめられ、通わずにいた。

昭和48年5月18日グループ指導を開始するに当たってのインテイクを行った。インテイクでの本児は、ガラスや金属類にのみ興味を示し、力まかせにガラスをたたいたり、玩具を投げつけて喜こんでいるだけであった。

本児は、常に医学的管理を要する身体状況にあったので、グループ指導に参加するに当たっては、主治医の許可を得てからということを経験とした。

③ グループ指導の経過とその考察

本児のグループ指導中における行動の変化については表8に示したとおりである。

インテイクの時とは異なり、グループに入ると、他児の行動の模倣や、T.のことばの模倣がみられるようになった。ことばの数は本来持っているものに、グループのメンバーの名前の「Kちゃん」「Mちゃん」「Sちゃん」が加わり、これを適切なよびかけのことばとして用いる事ができるようになった。

9~10月にかけて、身体の状態が良好となり、落ち着いて課題にとり組んだり、ままごと遊びや、他児への働きかけがみられたが、その後徐々に身体状態が悪くなり、一応目的にそった行動をとろうとしても、ふらついたり、力の加減ができず、荒々しい行動としてみえるようになった*。

表8のとおり、本児は生活習慣、あそび、対人関係の面でそれぞれ発達のあとがうかがわれるが、身体状態がこれに伴わず、日によって機嫌の良し悪しの波が非常に大きかったように思

* その後も悪化の一途をたどり、昭和49年1月初旬に病院にて死亡。

表8. T.Hの

	ことば	生活習慣	あそび・行動
7月	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 他児の名前を言う。 ◦ 自動車、自転車を指さして正しく言う。 ◦ 好きな遊び（水遊び等）の時は終始声を出す。 ◦ 叱っても効果なし。 ◦ 返事はできない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ スモック着脱に無関心。 ◦ 靴ははけるが、自他の区別はつかない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 感覚あそび（金物をたたく、水あそび）が多い。 ◦ トランポリン、平均台、ファニートネル等は、こわがってやらない。 ◦ 椅子のかたづけを他児をみてまねる。
8月			
9月		<ul style="list-style-type: none"> ◦ ボタンをはずそうとするがTの介助要。 ◦ スモックは手をかすと脱ごうとする。 ◦ パンツのあげおろし可。 ◦ 弁当を包もうとするがTの介助要。 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ◦ “イヤ、”と拒否する。 ◦ トイレにいくと“デナイ デナイ、”と言う。 ◦ パンツを脱ごうとするのを強く叱ると、表情がかわりパンツをあげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ボタンはめをしようとするが力が入らず介助要。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ままごとごっこ（お茶をつんでのむまね、皿を並べる等）をする。 ◦ 行動の模倣（イスはこび等）をしようとするが、身体がふらつく。 ◦ 元気がなく、イスにすわって他児をみている。
11月			

われる。

なお、本児は、グループ指導に通所するようになった直後から、前述のSセンターに週3日、ことばの教室に月1回通うようになっていた。〈長谷川〉

(vii) H.Y (男)

① 生育歴

本児は、父34才、母27才の時の第2子として誕生。正常分娩。出生時体重3,670g。手のかからない温和な赤ちゃんであった。生後3カ月目には、「人の顔をじっとみて笑う」「オンコーオンコーと人の顔を見てかたる」様子がみられた*。

4カ月頃気管支炎にかかり高熱が続き病院通いをしたが、その後は発育順調であった。しかし、2才頃から、名前をよんでも返事をしない、ことばが一本調子で排尿も自立しない事から、おかしいのではないかと思うようになった。どこに相談したらよいか迷っているうちに3歳児健診となったが、そこでは4才まで様子をみるようにと助言をうけた。

家族は父、母、姉（小学3年）、本児の4人。

② グループ指導に参加するにいたるまでの経過。

3才児健診で様子をみるよう助言をうけたが、母は心配のあまり知人の紹介で、本児、叔母

* 母の記録による。

変化

対人関係	課題	母子分離・身体状態
<ul style="list-style-type: none"> 他児の遊びは興味をもって眺めあとから寄っていく。 担当のTを独占したがる。 自分の思うようにならないと、Tや他児の髪の毛をひっぱる。 	<ul style="list-style-type: none"> Tがだっこしたり、手をつないでおれば、落ち着いてイスに座る。 シールは自分のものを選べるが正しい場所に、はれない。 	<ul style="list-style-type: none"> 分離不安強く、3回目からどうにか母子分離可能。
	<ul style="list-style-type: none"> 課題の時、他児にちょっかいを出す。 粘土の感触をこわがる。のりは手一杯になすりつける。 	<ul style="list-style-type: none"> Tが寄っていっただけで泣きわめき、分離できない。 途中で泣きねいりしたりし、疲れ気味。
<ul style="list-style-type: none"> ワゴンに乗っている他児に向けて「バイバイ」と云って手をふる。 攻撃的になる(つきたおす、かみつく等) 他児と手をつなごうとするが逃げられる。 		<ul style="list-style-type: none"> 母子分離できる。「バイバイ」と母親に手をふる。
	<ul style="list-style-type: none"> イスに一人で座り、名前を呼ぶと、右手をあげ「アー」と発声。 課題は、Tが手をそえるとやろうとするが、長続きしない。 シールを自分のところにはろうとするが、手が思うように動かない。 	<ul style="list-style-type: none"> 身体の調子悪い。(顔にしっしんできる、髪の毛がぬける、せきをする) ころびやすくなる。 11月20日より休み。

と共に児童相談所に来所した。

インテイクでの母は、非常に不安定な状態であり、時おり泣ぐみ切々と訴えた*。本児は遊びに熱中している時でも母の話に耳を傾けているのか、本児のことに話がふれると、敏感に反応し、母の所に走って行き、抱きついて泣き出す様子がみられた。児童相談所では、総合病院での精密検査をすすめると同時に、母子の情緒安定をはかり、本児の対人関係を改善するため治療を開始した。

《1対1のプレイ・セラピー開始時の本児の状態—昭和48年5月—》

- ことば：単語はかなり言えるが一方向的であり問いかけには無反応である。オーム返しがあり、コマースルを時々言う。要求は単語ではっきり伝える。
- 遊び、行動特徴：玩具には興味を示さない。砂が好きである。広告に興味を示す。時折、両手を広げ指を折りそしてみつめるくせがある。
- 排泄：母が時間をみて連れて行く。介助を要する。
- I病院での診断：「自閉症」の疑い

そして昭和48年5月から8月まで、1対1のプレイセラピーを行い、その変化を表9に示した。表9のとおり、「ことば」「あそび、行動」「母子関係」「家での状態」と全ての面で急激

* 母親のみでは来所できず、叔母もつれそって来所したほど不安定だったと言える。

表 9. H.Y の個人プレイセラピーにおける変化

こ と ば	あそび・行動	母との関係	家 での 状 況
5/30 、 6/13	<ul style="list-style-type: none"> ・じきにTになれて甘えを示す ・行動の模倣がある ・玩具への興味を示す ・緊張すると両手を打ち“ウー”と声をあげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・母との分離不可 ・母が本児の話をしだすと遊びをやめて走って行き抱きついて泣く 	<ul style="list-style-type: none"> ・デパートで初めて玩具（相談所のプレイルームで遊んだトラック）を欲しがる
6/27	<ul style="list-style-type: none"> 玩具への興味が広がり、目的にそって使用する 	<ul style="list-style-type: none"> ・母と分離可能となる ・母が何を話していても関係なく遊んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> ・“カルピス チョーダイ”と二語文で要求を伝える ・“パパ オハヨウ”と突然話しかける。 父に関心を示し、母の行動を模倣する。
7/11 、 8/15	<ul style="list-style-type: none"> ・身体をTと一緒に動かす遊びを好む ・Tとままごとあそびをする ロボットとあそぶ ・緊張の度合が少なくなる 		<ul style="list-style-type: none"> ・遊園地で他児に関心を示す。 ・“うれしい”“たのしい”ということばを使用できる。 ・排尿自立。 ・母との対話可能となる。 母 “～ほしい?” 本児 “いらない”
	<ul style="list-style-type: none"> ・要求は単語 ・ことばの模倣性がみられる 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ことばの模倣 “オミズチョーダイ”と場に合わせて使用 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・場に合ったことばの使用が広がる。“テレビツケテ”“ドアアケテ”等 ・ロボットにコップを持って行き “オミズノムカ?” Tに “オミズチョーダイ”と云いに来る 		

に変化している。セラピストの関係もある程度確立し、甘えたり、からかったりの行動がみられるようになった事などから、集団の中での治療が必要な段階ではないかと思ひ、昭和48年9月からグループ指導に参加させた。

③ グループ指導の経過とその考察

グループでの様子は、表10のように、生活習慣や母子関係での変化はみられるが、本児の根本的な問題である「対人関係」、「ことば」の面に関しては、グループ指導に参加する時点で予測したほどの変化はみられなかった。この事について下記の事が考察される。

(イ) 構成メンバーについて

精神発達遅滞児中心のグループが果して本児にとって適切なものであったか否か。

(ロ) 担当者との関係について

1対1でのセラピーを担当したセラピストが、グループ指導においても本児の担当者としてついたのであるが、すでに他児童(T.H)をも担当しており、十分な手をかけられなかった事。

(ハ) カリキュラムの内容について

遅滞児中心の生活指導や課題学習が主であった事。

(二) 指導態度の相違について

1対1のセラピーにおいては非指示的な療法を用いたが、グループ指導では指示的な指導が主であった事。

自閉症児の治療教育について、これまでも多く論議されてきたところであるが、本児についてもグループ指導に移行する時期が適切であったかどうか、グループ指導に平行して1対1のプレイ・セラピーを継続する心があったのではないかなどについて更に検討を要すると思われる。

本児は、今年の1月末からZ保育園に通園しており、現在は4才児クラスの自由時間と給食時間に母親同伴で参加している。

今後共治療的かわりを継続していく予定である。(長谷川)

(2) 子どもグループのまとめと考察

7人の精神発達遅滞幼児と7人の担当者によって始められた本グループの指導は、週2日づつ(盆休み、正月休みは除く)行われ、9ヶ月の間に通算50回を数えるに及んだ。

1日のスケジュールは、大ざっぱには、基本的な生活習慣の指導や課題設定場面での指導という、指示的な関わりがもたれる時間と、自由にあそべる非指示的な時間という2つに分けられた。一人の子どもに一人の担当者がつくという担当制をとったのは、比較的重い障害をもった子どもが多かったために、手厚い指導を加えるという意味と、担当者との一対一の人間関係が、他児とのそれへと発展していくことをねらいとした、いわゆる、プレイ・セラピーの延長という考え方にもとづいたものである。実際の指導に当っては、個々の子どもの自発性を尊重し、伸び伸びとした自己表現のできる場と関係をつくるべく努力するという基本姿勢を保った。

個々の子どもの経過と考察については、(1)に詳述したので、ここでは、グループ全体の経過の中から、いくつかの点をとりあげて考察してゆきたい。

① 本グループは、遅滞の原因も程度もまちまちな子どもたちの集りであったから、9ヶ月間の変化を述べるには、各々の角度から検討しなければならないが、大まかには次のようなことがいえる。

比較的重い遅滞をもった子どもにとっては、基本的な生活習慣の指導はより効果的であったが、すでに自立している軽度の子どもと、自閉的な子どもにとっては、それほどの意味はもたなかった。とくに、自閉的な子どものばあい、指示的な場面にはうまく適応できないことが多く、かえって、イライラした感情を抱かせることになり、これがあそびや対人関係にも持ちこされてしまうことがしばしばみられたりしたからである。

軽い遅滞をもった子どもにとっては、指導内容や、仲間うちとの交流の中で得られたものよりは、グループという、受容的なふんい気によって、劣等感を解消させ、伸び伸びとした自己表現ができるようになったという、セラ皮的な効果の方が大きかったように思う。また、こうした子どもたちにとって、時々参加した健康な普通児I.U(女)の存在は、予想以上にプラスの刺激を与えたようである。

② 一対一の担当制は、自閉的な子どもたちに対して、対人関係の基礎づくりという役割を十分に果たしはしたが、これが、他児とのそれへと広がってゆくまでにいたらぬうちに9ヶ月を終えてしまった。中軽度の子どもたちのばあい、これは多くが女兒であるが、女性担当者

表 10. H, Y の

	こ と ば	生 活 習 慣	あそび・行 動
9月	<ul style="list-style-type: none"> 二語文による要求は可能。 (例「ドアアケテ、」 「オンブチテ。」) 簡単な対話ができる。 (例 C: イタイ→T: どこが?→C: ココ) 返事はできるが、視線があわない。 おうむ返しあり。 CMをいう。 	<ul style="list-style-type: none"> 排尿自立。 靴をはけるが自他の区別不可 ボタンはずしは出きるが、一人で着脱不可。 弁当は他児がそろろうのを待てずに食べ出す、同方向から食べ、よごれるとすぐふく。Tの指示でしまえる。 	<ul style="list-style-type: none"> 緊張すると両手をたたき、「ウー」という声を出す。 他児の動きをみているが、参加してはいかない。
10月	<ul style="list-style-type: none"> Tの強制からのがれようとして「ヨロシク、」 「イイカラ、」を連発。 名前を呼ばれると、勝手なことを話し出す。 早く帰りたい時、Tをオルガンまでつれていき「チャヨナラ、」という。 		
11月			
12月	<ul style="list-style-type: none"> 髪の毛を他児にひっぱられて「ヤメテ ヤメテ」という。 遊んでいて、こわくなると「ママー、」 「タスケテ、」という。 おうむ返しやCMをいう事は続いている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「お弁当、」としらせると走って入室し、他児をおしのけて先に手を洗う。 弁当の肉、野菜をたべない。 	<ul style="list-style-type: none"> 棚の上になごろび、彼方をみてニャーとしている。 クレヨンの箱や中の紙が気になり、開けたり、出したりをくり返す。 他児と共にワゴンにのり、ニコニコしている。
1月			
2月		<ul style="list-style-type: none"> スモックのボタンはめ可能になり、Tの指示で、たたんで棚におく。 弁当を持ってきてすわり、他児がそろうまで待っている。好き嫌いがなくなる。同方向から食べたり、汚れると手を必ずふく事はなくなる。 	
3月			

に対して、母性的なつながりをつよく求めて離れなくなってしまうことがあるなど、一対一でつくことの是非を問われる場面に、しばしば遭遇した。担当者の未熟さも、否めない事実ではあるが、遅滞の程度が数段階に及ぶグループを扱う場合に、つねに問題となる普遍的なテーマであるので、今回の経験をふまえて、今後さらに検討を加えたい。

変化

対人関係	課題	母子分離
<ul style="list-style-type: none"> ◦ Tから積極的に動きかけると何とか応じる。担当のTに要求を示す。 ◦ Tとの身体接触をすごく喜ぶ。 ◦ 他児には、よっていかない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 指示に従えない。イスにすわらず動きまわる。 ◦ 歌や遊戯には関心示さない。 ◦ 課題は理解できるが長続きしない。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> （例：◦ 多色の中から同色の おはじき選り、ひもと おし ◦ シールを正しくはれる ◦ はめ板できる </div> <ul style="list-style-type: none"> ◦ のりが手につくのをいやがる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 母親と分離させると大声で涙を出して泣く。しばらく母親も同室する。 4回目まで泣きつつも「ママ バイバイ」とTのおうむ返して言うて分離。 10月には母子分離確立。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 担当のTを独占しようとする。 ◦ R.M(女)に髪の毛をひっぱられて泣く。 R.M(女)とぶつかって、にらみあいする。R.M(女)に押されたのに対し、押して髪をひっぱりに行く。 ◦ 「カゴメ」には興味示さない。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 歌や遊戯を少しするようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 来所し、奇声を発しつつ廊下を走ってきて入室し、母親を部屋から押し出す。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 他児が、かん高い声をあげたり独占したいTによっていった他児に対して、手で顔をひっかくようになる。(三月末には少なくなる) ◦ 他児の遊びをニコニコしている。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 歌や遊戯、課題等に対して、あまりやる意欲なし。 	

③ グループを開始して6ヶ月目に、参加児童のひとりを亡くすという、悲しい現実を迎えてしまった。つねに、医学的管理を要する身体状況にあり、また、そのことを条件として参加させたのであったが、死という現実を迎えてみると、6ヶ月間にみせた変化や成長を、どう評価してよいのか、正直のところわからない。週2日以上に通園は無理だという医師と、できる

範囲内でできるだけ通わせるべきであるという医師の、2人の指導の間を迷いながらも、少しの救いをも求めて、他の通園センターや、ことばの教室に通わせはじめた母に対して、つよい指導姿勢をうちだせなかった自分たちの自信のなさを、今となっては後悔するだけである。本グループは、児童相談所としては初めての試みであり、指導に当たるものの意気込みも大きかっただけに、手がけた子どもの死は、あまりにも大きな衝撃であった。深く反省するとともに、亡くなった子どもの冥福を、心から祈りたい。

④ 担当者全員が集まって行われる担当者会議では、各々の子どもや、指導の内容等について、お互いに忌憚のない意見を交換しあったものの、これをさらに深いものにするには、より多くの時間を設けるべきであったと反省される。次年度への課題としたい。

⑤ 最後に、児童の健康管理の意味から、通風という設備上の問題が解決されなければならないし、教材・教具の不足ということも、次年度の予算的措置を期待して、指摘しておきたい。

グループを始めた時点から、一般保育園、あるいは幼稚園への入園を指向し、母親に積極的な指導を行うとともに、保育園、幼稚園に対しても積極的なアピールを行ってきた。これに対して、積極的な受け入れを示した幼稚園、自信はないが、児童相談所の指導を条件にするなら受け入れてもよいという保育園など、様々ではあるが、前むきの姿勢を示すばかりが多く、3幼稚園で各1名づつ計3名、1保育園で1名の受け入れが可能となった。しかし、この裏には、内容もきかずに、子どもをみただけで、ことわり口上をきりだすという幼稚園のあったことも、事実としてあげておかなければならない。

今回は、児童相談所としては、初めての試みであり、試行錯誤のくりかえしばかりであったが、この経験を上台に、さらに発展したものにすべく努力したいと考えている。(宮本)

2. 母親グループの経過とその考察

(1) 全般的な動きについて

母親の悩みや苦しみをお互いにつけあひ、考えあえる場として、子どもがグループ指導を受けている時間と平行して、フリーで気がねのない、母親グループの話し合いの場をもっていた*。

社会に対するひげめや恥といった感情にうちひしがれている母親は当初からみられず、明るい母子が大部分であり、グループ指導には積極的に通いとおした。

母親同士の横のつながりが深められた事、母親の社会的な意識の高まりの中で施設作りの活動に意欲的に取り組む親が出てきた事、母親自身が特別児童扶養手当などの制度や施設の状況などを確認できた事、母親自身が一般保育園や幼稚園での受け入れに対して積極的に動いた事等が、母親グループの成果としてとらえられうると思う。

以下、前期・中期・後期の三つにわけて、母親グループの動きの概略をのべていきたい

(i) 前期(1973年7月～9月)の動き

話し合いの場の雰囲気は明るいが、お互いに他の子どもの障害の程度や傾向を知ろうと努めており、母子分離の出きない子どももいたりして、母親の思惑には色々なものが存在していた

* 特にテーマ設定をもったのは、精薄児通園施設の見学、ことばの教室より講師を迎えて話し合い、クリスマス会、進路の方向付けの個別面接、お別れ会等であり、あとはフリーな話し合いの場とした。

時期である。

R. M の母親が中心となって話題提供する事が多く、ざくばらんな雰囲気作りがなされていき、8月～9月の頃にはお互いに家庭訪問をしあって交流を深めていった。

この時期に、一部の子どもに対して特別児童扶養手当の申請の助言を実施した。

(ii) 中期 (1973年10月～12月)

お互いに子どもの障害の程度に対する認識が深まるにつれて、お互い同士の比較が徐々になされ、M. S と T. H の母親がまとまり、言語を持っている H. Y, S. Y, K. M の母親がまとまり、二つのグループにわかれて話をする機会が多くなってきた時期であり、それは障害についてとか福祉施策について学びとろうとする意欲や態度の違いにも現われてきた。

また、今後の進路についての話が出てきた頃から、幼稚園を指向する者とそれが望めそうもない者との間で、幾分こだわりの意識が感じられた。

(iii) 後期 (1974年1月～3月) の動き

今後の見通しがたった母親とたたない母親にわかれ、一月末から予備的に一般保育園に通園しだした H. Y の母親からの情報を中心として今後の展望について考え合った時期である。三月末の解散まで元気に通いとおし、四月以降もお互いに交流をもっていきたいという願いを大部分の母親がもっていた。

(2) 個々の母親の動きについて

ここでは、個々の母親について、簡単なプロフィールを述べ、その動きについて簡単に表示*していきたい。

(i) K. M の母親

本母親は、グループ内で一番若く、内向的性格ではじめは鈍重な印象をうけるが、物事にも良く気付き、徐々にグループ内での発言もみられるようになった。相手からの働きかけで話をするタイプであり、素直な応答ぶりである。子どもの面倒見もよく、当初より明るい印象で、やるべき事はきちんとやっている。

本母親の動きを、表 11 に示した。

(ii) R. M の母親

本母親は外向的な性格であり、他者へのざくばらんな話しかけが多く、母親グループの雰囲気に影響を与えた。物事に無頓着であり、子どもの養育にも欠ける面が多くみられ、放任してきたという印象である。

本母親の動きを、表 12 に示した。

(iii) S. Y の母親

本母親は、子どもの療育について心底からの熱意を欠き、母親グループの話し合いにも他用で外出することが多くみられた。家庭においても、S. Y の世話を姉にまかせておく事が多かったと思われる。しかし、後期には、グループのまとめ役として積極的な動きを示した。

本母親の動きを、表 13 に示した。

(iv) M. S の母親

本母親は、地味であるがしっかり者という印象であり、経済面・生活面の感覚が非常にノー

* 以下の表示において用いられる「前期」、「中期」「後期」は、(1) で前述した区分と一致するものである。

表 11. K.M の母親の動き

	前 期	中 期	後 期
子どもの障害についての認識	遅れについては認めているが、何時かは遅れをとり戻せるという認識。	行動面ののろさを認めつつも、音楽に対してのリズミかるな事が救いとなる。	遅れについて、とり戻せるというものでなく将来とも心配であるという認識。
妹との関係	妹の伸びに比較して姉(K.M)の伸びの悪さを気にする。	今後の姉妹関係について不安をもち、接し方等についての助言を希望。	妹の発育が姉を追い越しそうであり、いやが応でも姉の遅れを認識する。
将来への展望	当初は、良い施設はないかについて相談にくる。しかし通園施設見学を機会に、施設に対して拒否的となる	一般の幼稚園への入園を希望するようになり、積極的に働きかける。	将来は、特殊学級でやっていきたいという希望。
グループ参加について	遠方より、欠かさず参加しグループにとけこむ。	来所を非常によろこび、グループ指導の効果を認める	グループ参加には積極的、他の母親とのつながりもできる。

表 12. R.M の母親の動き

	前 期	中 期	後 期
子どもの障害についての認識	“馬鹿っ子”という表現を平気で使用、反面では、精薄というよりは学力の劣る普通児的なとらえ。	通園施設入所をすすめられて、ショックをうけ、より真剣に問題をとらえるようになる。	
将来への展望	絶望したり、希望を持ったりの安定しない気持。	通園施設入所に対して、強い拒否反応、一般幼稚園を強く指向。	将来は特殊学級を指向。
グループ参加について	集団の中に子どもを入れたという点で満足。	休まずに通所し、唯一の指導の場として活用。	他の母親との協調に問題がでてくる。

表 13. S.Y の母親の動き

	前 期	中 期	後 期
子どもの障害についての認識	ことばがでないという事のみ強調。通園施設見学は不参加。	ことばのみでなく、知能の影響についても若干考え出す。	知的な遅れとは意識していない。幼稚園入園後の心配をする。
グループ参加について	グループ指導の中の課題保育的なものに対して満足を示す。	参加についての問題意識はうすい。	幼稚園入園までの暫定幼稚園的なとらえ。

マルな印象をうける。グループでの話し合いには積極的に参加し、発言も多くみられた。

本母親の動きを、表 14 に示した。

(v) K.Y の母親

本母親は、肥満体であり、朴訥でおっとりし物事にこだわらない明るい性格である。

表 14. M.S の 母 親 の 動 き

	前 期	中 期	後 期
子どもの障害についての認識	遅れについては認めるが、精薄ではなく自閉症としてのとらえ。	子どもに目立った変化がみられないが、あくまで自閉症としてのとらえる。	自閉症としてとらえている。
将来への展望	通園施設に対して強い関心を示す。	幼稚園入園を希望するが、スムーズにいくとは考えていない。	通園施設への入所申請
グループ参加について	積極的に参加、母親の話合いの場にも積極的、T・Hの母との結びつきが強まる。	10月から、他の無認可通園施設にも通所するが、殆んど休ませずに通所する。	参加については意義を認める。施設作りの親の活動にも積極的関与。

表 15. K.Y の 母 親 の 動 き

	前 期	中 期	後 期
子どもの障害についての認識	ことばを話せないという事のみを目をむける。未熟児だったから当然というとらえ。	将来は何とかやってゆけるとの楽観的なとらえ。	重度の障害といううけとめ方はしていない。
母子分離について	子どもと母親がお互いに分離不安が強く、子どもの方を気にして、たびたびプレイルームの方に行く。	母子分離ができた事を、素直によるこぶ。	
グループ参加について		他の母親とのつながりはあまり持たず、淡々としてすごす。	グループ参加を素直に喜び今後の指導も希望。

本母親の動きを、表 15 に示した。

(vi) T.H の母親

本母親は、しっかり者という印象をうけ、多弁ではないが必要な事は正確に話す。障害児についての知識も豊富で、T.H への理解も深かったと言える。

本母親の動きを、表 16 に示した。

表 16. T.H の 母 親 の 動 き

	前 期	中 期
子どもの障害についての認識	“てんかん”による遅れをとらえ、病気という事に幾分、なぐさめ、希望をもつ。	薬物療法に期待し、今よりもよくなると考えている。
将来への希望	特殊学級を指向。	前期と同じ。
グループ参加について	参加を喜び活用、子どもへの理解も深い、親の期待感と積極性に子どもがふりまわされる面もある。	他の諸施設にも積極的に通い、子どもの療育に必死である。

(vii) H.Y の母親

本母親は、感情の動きの多い明朗な性格である。子どもへの愛情も深い。子どもの状況に左右されて気持もゆれ動く事が多い。

本母親の動きを、表 17 に示した。

表 17. H.Y の 母 親 の 動 き

	中 期	後 期
子どもの障害についての認識	変わった子であり、自閉症児としてとらえる。子どものクセや奇行について多く話す	自閉症としてのとらえ。子どもの変化している事を認める。
将来の展望	6才までに基本的な生活訓練をして、特殊学級を指向。	中期と同じ。
グループ参加について	中途からであるが、意欲的、積極的に参加	保育園入園できた事を喜ぶ。

(3) 母親グループの反省と今後への考察

母親グループの全体の動きや、個々の母親の動きについては見てきた通りであるが、7人の個性の違い、そして実際の障害もまちまちで、それに対する認識もそれぞれに違う母親がグループとして集まり、この母親達に共通なことは、程度の差はあれ知恵遅れの障害を持っていること、その子を教育してくれる集団の場がない事だけであった。この共通する二点を繋ぎの糸として母親同志の横のつながりを深めていったわけであるが、グループワークである以上そこに担当者側の余り指示的な方向付けがあってはならないということを前提として関与して来た。そして障害に対する認識も、将来への展望も、自らが目ざめ自己決定してゆく過程で、示唆し、教示しえることをお手伝いしていくという立場を堅持した。

基本としては「何がその子の福祉につながるか」という事を根底にして、社会的な受入れの立遅れを認識しつつも、一般幼稚園への積極的な働きかけを奨励してきた。しかしこうした基本にもかかわらず、早期治療を強くうち出し、子供に対する期待感を持つ一母親に対し、子供が疲労し振り回されてしまう可能性について強く指導出来なかったという点で福祉につながらなかったという反省を持つ。

さらに、このグループ活動が唯一の友人を得る場として活用され、親同志の解散後のつながりへと発展した意義を認識するとともに、多くの反省すべき点も存在し、その反省にもとづいての今後の指針としたい点について若干のべておきたい。

- ① 2ヶ月に1回位の割でポイントを置いたテーマ設定により、講師を所内外から呼んで、専門的知識を深める。
- ② 母親にも課題を設定し、真剣な取組みを期待する。
- ③ 施設のみでなく、養護学校、幼稚園、ことばの教室等への見学のわくを広げる。
- ④ 父親を含めた会を持つ。

など、障害を持つ母親の貴重な個人的な時間でもある事を考慮し、かつメンバーの意思を尊重しながら、上記のような具体的なテーマも加えてゆけばより良いグループへの成長が考えられるのではないだろうか。また、社会への働きかけを持てる様な強いグループ作りをしたいものである。(高瀬、湯沢)

—お わ り に—

以上において、昨年の7月から今年の3月にわたっての精神発達遅滞幼児のグループ指導の取り組みについて、子どもの動きおよび母親の動きを中心として記述してきた。

我々は、この9ヶ月間の取り組みですべてが終わったとは決して考えておらず、むしろ長い道程の第一歩をふみ出したにすぎないと感じている。

ここで述べられた子ども達とは、その出会いを大切にしつつ、今後ともできるだけかかわりあい続けていきたいし、かかわりあい続けていく事こそがより大切なことであろうと考える。

また、ここで述べられた取り組みの貴重な体験を土台として、新たな子どもを対象としての新たなグループ指導の取り組みがこの6月初旬からすでに開始されており、それに対する物的・人的な援助も少しずつ確立されつつあると言える。

ともあれ、このささやかなまとめが、我々にとっての第一歩であるだけでなく、岩手県において殆んど取り組まれていない障害幼児問題の取り組みの出発点とならん事を切望したい。

〈加藤〉

——本論文の執筆担当は各項末尾の〈 〉内に示されたとおりでである。但し、それぞれについて全員協議のうえでまとめられたものである事を付しておきたい。

末尾ではあるが、グループ指導に参加した子ども達とその母親に対して厚く謝意を表したい。そして、取り組みの中途において急逝した T.H 君にこのささやかなまとめを献げたい。——

(1974年6月26日)

文 献

- 1) 精神薄弱児研究：全日本特殊教育研究連盟編，日本文化科学社。
- 2) ちいさいなかま：鳩の森書房。
- 3) みんなのねがい：全国障害者問題研究会。
- 4) 保育と教育の場をもとめて：東京の障害をもつ子どものグループ連絡会47年度のあゆみ，ささら書房，1973，p.9
- 5) 4) に同じ p.178～180。
- 6) 厚生省児童家庭局：保育所における障害児の保育，手をつなぐ親たち，No.220，1974.6. p.30～31。
- 7) 望月郁夫：通園施設の展望—局長通知の改正をめぐって—，愛護，197，1974. 4，p.37～41。
- 8) 長瀬又男：一般保育の場における発達障害児のしつけについて，小児の精神と神経，13-2.3.4，1973。
- 9) 宮下俊彦：幼児教育の内容・効果—幼稚園・保育園のなかでみんなといっしょに—精薄児研究，179，1973. 8，p.26～31。
- 10) 手をつなぐ親たち，No.215，1974. 1，p.28～32。
- 11) 田中杉恵：保育園・幼稚園全員入園へのとりくみ，みんなのねがい，No.42，1973. 8，p.70-75。
- 12) 沙加戸，山形：保育集団の一員としてそだちあう障害児，ちいさいなかま，Vol.30，1973. 12，p.14～17。
- 13) 茂木俊彦：障害児保育の問題をめぐって，ちいさいなかま，Vol.30，1973. 12，p.6～13。
- 14) 川野美和：障害児の保育所づくりに援助を，朝日新聞1973. 8. 1付
- 15) 蒼風3号：土と愛子供の家保育所建設準備委員会，1973. 8。
- 16) 佐伯幸雄：情緒障害児受け入れの歴史と保育に対する基本姿勢，公開保育資料，1974. 2。
- 17) 普通児の中での障害児教育：幼児と保育，1973. 11，p.70～75。
- 18) 東京都情緒障害児保育研究会々報（第4号）
- 19) 池 洋一郎：保育園に入れたダラン症児のM子ちゃん，ちいさいなかま，Vol.37，1974. 6，p.66～

67.

- 20) 四津谷礼子: 普通幼児とともに、手をつなぐ親たち, No.211, 1973. 9, p.10-13.
- 21) 岩谷満佐男: 保育園のなかで育つ淳ちゃん, みんなのねがい, No.49, 1974. 2, p.14~18.
- 22) 米山・古山: 健の成長をねがいつつ, 保育の教育の場をもとめて72年度版, ささら書房, p.93~95.
- 23) 塩川雅子: 幼稚園児と遊んで一普通児との交流3年一, 手をつなぐ親たち, No. 220, 1974. 6, p.4~8.
- 24) 小島訓子: “へんな子” から “よっちゃん” へ, 手をつなぐ親たち, No.220, 1974. 6, p.18~19.
- 25) 飯野まゆみ: みんなの中でたくましく育っています, 保育と教育の場をもとめて72年版, ささら書房, p.76~79.